



『忘れられた日本人』の舞台を旅する ～宮本常一の軌跡～

木村哲也 著

河出書房新社 刊

定価 1,078円（本体 980円＋税）

日本全国を旅して歩き、庶民の暮らしを探究して膨大な記録を残した宮本常一（1907～81）は知る人ぞ知る特異な民俗学者だ。『旅する巨人～宮本常一と渋沢敬三』（文藝春秋・佐野眞一）が第28回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞して話題になり、宮本が再び脚光を浴びる1997年以前に、一人の青年が宮本の足跡を辿ってミニコミ紙に丹念に掲載した記録が本書の「原型」となる。

著者の木村（1971～）が宮本の代表作『忘れられた日本人』（岩波文庫版）を手にしたのは、「大学入試を目前に控えた」90年春、「土佐への帰省のおりだった」。なかに収められた聞き書きの「土佐源氏」に衝撃を受け、早速ヒッチハイクの旅を始める。爾来、普通列車と路線バスと徒歩と野宿の「貧乏旅行」を重ね、『忘れられた日本人』の舞台を訪ね歩いて克明な記録を重ねた。93～96年の

ことだ。

その私家版が河出書房新社の目に留まり、2006年に単行本になった。本書は同名の文庫版で、2024年7月に刊行された。記録された「原型」や単行本から久しい時を経ているが、宮本の代表作を辿り直し、「足で刻んだ民俗紀行」はかえって新鮮で貴重な価値を増している。

宮本が1960年に『忘れられた日本人』（未来社）を刊行してから、すでに60余年。木村が『忘れられた日本人』を手にした90年はバブル経済が崩壊し、宮本の足跡を記録し始めた93年には55年体制が崩壊する戦後経済・社会の転換期に当たっていた。その後は「失われた30年」と言われ、日本人の意識や行動が大きく変化した。「格差と貧困」が暮らしを脅かしている今日、本書はその後の庶民の行方を探る思索の旅に読者をいざなう好著だ。著者は現在、国立ハンセン病資料館学芸員を務めている。

さんかいの げん
(山海野 玄)